

院政期女房歌人「堀河」考

高野瀬 恵子

要旨 院政期に複数存し、同一か別人かなど区別の難しい女房歌人の堀河について、検討した。必ずしも明快な結論ではないが、先行研究を踏まえつつ、資料を再整理して、概ね次のような結論に至った。①『袋草紙』雑談の堀河殿（郁芳門院根合）の堀河殿は、郁芳門院媍子内親王に仕えた女房であり、大宮右大臣俊家女である。彼女は『郁芳門院安芸集』『康資王母集』『行宗集』『江帥集』に登場する「ほりかは」「堀河殿」とも同一人物と考えられる。②源顕仲女の堀河は、初め前齋院の禎子内親王に仕え、前齋院六条の名で『金葉集』に歌を採られたが、禎子内親王が出家した後に待賢門院璋子の許へ再出仕したものと推察され、待賢門院堀河の名で活躍した。③『金葉集』に摂政家堀河として歌を残した堀河は、忠通家女房で、大治元年八月の「忠通家歌合」に連なり、また源顕仲が大治三年八月に西宮で催した歌合にも参加したと思われる。この堀河は待賢門院堀河とは別人と考えるのが妥当であろう。以上の他に、④資料は少ないが二条太皇太后宮堀河と呼ばれた女房がいたものと思われ、『林下集』の歌によれば、令子内親王にその齋院時代から仕えた女房であった可能性もある。⑤嘉応元年十月の「散位敦頼住吉社歌合」に名を残す前太政大臣家堀河については不明な点が多く、摂政家堀河がその頃まで生存した場合は同一人物の可能性があらう。

はじめに

院政期には「堀河」と呼ばれた女房歌人が複数存した。有名なところでは待賢門院堀河がおり、他に『袋草紙』(雑談)の白河上皇が女房の歌をわが詠とした逸話に登場する堀河殿、『金葉集』(四七〇番)の摂政家堀河、『風雅集』(一九六五番)に見える二条太皇太后宮堀河が挙げられる。

このうち待賢門院堀河は『今鏡』等に顕仲卿女と記される人物で、『金葉集』の前齋院六条と同一人物と考えられている。この堀河については早くから松田好夫氏⁽¹⁾や深菫由紀子氏⁽²⁾らの先行研究があるほか、森本元子氏による詳細な研究⁽³⁾がある。家集についても錦織周一氏『待賢門院堀河集全注釈』⁽⁴⁾がある。他の三人の堀河のうち、『袋草紙』(雑談)の堀河殿は「郁芳門院根合」に見える堀河殿と同一人物と思われる、また摂政家堀河は忠通家女房であることから、「摂政左大臣忠通歌合」(大治元年八月)に見える堀河と同一人物の可能性⁽⁵⁾がある。これらの堀河については、萩谷朴氏も『歌合大成』の「忠通家歌合」解説で若干の考察を示されている⁽⁶⁾。また、萩谷氏以前にも、野中春水氏による源顕仲の娘たちと同時代の堀河についての論考⁽⁷⁾がある。しかしながら堀河と呼ばれた女房とその歌を調査してみると、待賢門院堀河を含めて、どれとどれが同一人物でどれが別人であるのか、簡単には片付かない点が見受けられる。例えば、『袋草紙』(雑談)の堀河殿の場合、『郁芳門院安芸集』『康資王母集』に見える「ほりかは」や、『江帥集』『行宗集』に見える「六条院の堀河殿」とは別人かどうか、という問題がある。また「忠通家歌合」に見える堀河は『万代集』等によれば待賢門院堀河と同一人物となるのだが、それは『金葉集』の摂政家堀河とは別人なのかどうか。更に、これと関係して、待賢門院堀河が前齋院六条と呼ばれた時期の主人、すなわち前齋院とは、一般的には令子内親

王とされているが、それは妥当かどうか、また待賢門院堀河は二条太皇太后宮堀河とはどのような関係になるのか、等々の問題もある。これらは森本氏や萩谷氏の考察でも、他の先行研究でも、未だ解決をみていない。そこで本稿では、十一世紀末頃から十二世紀後半期にかけての女房「堀河」について、諸資料を整理し、先行研究や問題点を検討しつつ、私見を述べたい。なお「ほりかは」は、「堀川」「堀河」の両様の表記があるが、文中では、引用部分を除き、「堀河」で統一した。

1 『袋草紙』（雑談）の堀河殿

まず活躍時期が最も早いと見られる『袋草紙』の堀河殿、すなわち郁芳門院根合の堀河について整理する。以下、資料中の傍線は私意による。

①白川院、於鳥羽殿九月十三夜池上月ノ和歌ニ、…（中略）…同和歌御製云、

イケミツニコヨヒノ月ヲヤトシモテ心ノマ、ニワカモノトミル

是ハ女房堀川殿大宮右府女ノ歌也。而内々ニ今日和歌イカ、ト御尋之处ニ、申此歌也。秀逸歌也。仍仰ニ云、汝カ歌ニ不似、可為我歌トテ為御製云云。

（新日本古典文学大系『袋草紙』巻末の原文による。但し校訂本文に合わせて一部改訂。②も同。）

②「郁芳門院根合 寛治七年 判者六条右府」

三番 郭公

左勝

堀河殿

ふたこゑとなとかきなかぬほとゝきすさこそみしかき夏の夜ならめ

雅俊卿

なかすとてうちもふされすほとゝきすこゑまつ人もねかたかりけり

左、いとくをかし。右、上下ことたかひたる心地して、また郭公きかすとして負了。

江記云、右方人云、於御前專不詠夜短詞。依濫於世也。一首鄙詞三所、なとか、さこそ、ならめ等也。如此詞一
所於凡、況三所乎云々。
〔袋草紙〕①に同じ

③(前略) 子時許事了、人々退出。事了後タツトテ、堀川殿、

アヤメクサエモイハヌマノナカキネハカクルタモトソユタカナリケル

右方ニ、アキトノニヨミカケタマフニ、カヘシナシ。左方ワラフ。…(中略)…

女房方人

左 … 堀川殿故大宮右大臣女 …

已上十人の中に、上臈五人、是院中之英華也。仍所被選定也。但御匣殿一人不入。是当時右府之女、右兵衛
督雅俊同母之弟也。為第一之上臈之上、是又外戚也。依為貴重人不入云々。」

〔中右記〕寛治七年五月五日条)

これらによると、この「堀河殿」は白河天皇皇女媞子内親王(一〇七六〜九六)に仕えた女房と思われる。媞子内
親王は父上皇に鍾愛され、齋宮退下の後は六条邸を御所として(上皇は承保二年に藤原顕季に命じて六条院を造営さ
せていた)、上皇と行動を共にすることが多かった。寛治元(一〇八七)年、同母弟堀河天皇の准母となり、同七
(一〇九三)年郁芳門院の院号を受けた。資料②③の根合は寛治七年五月五日、菖蒲の節会に、女院の病災払除を兼

ねて行われたもので、事実上の主催者は白河上皇、永承六年五月五日の殿上根合に倣い、根合三番の後、歌合五題（菖蒲・郭公・五月雨・祝・恋）各二番計十番の催しであった。「大宮右府」とは藤原俊家、従ってこの堀河は、母は不明だが、大納言宗俊、及び歌人の基俊らの姉妹にあたる。③が「堀河殿」を上臈とするのは右大臣の息女として当然であろうが、後述するように、森本氏は、この上臈であること等を理由に、以下の資料④⑤⑦に挙げる諸家集の「ほりかは」や「堀河殿」とは別人と見なされた。⁽⁹⁾

④『郁芳門院安芸集』（冷泉家時雨亭文庫蔵・為家本『安芸集』により、一部他本により校訂した）

七日ほりかはのもとより

はることのけふのわかなをもろともにこのみにとしをつみそためつる (四)

かへし

かすかのゝゆきうちはらひかたみになつめともしのわかなゝれかし (五)

冬のはしめに六条の院のせんさいをなかれてほりかはに

しもかれのあさちましりのをみなへしたものとつゆやおなし秋なる (三二)

鳥羽殿にはしめてまいりたるになかしまにほとゝきすのほのかになきしにほりかは

なかくゝになかすもありやほとゝきす (五一a)

とありしかは

こゝろつくしのをちのひとこゑ (五一b)

郁芳門院安芸は安芸守藤原忠俊の女で、母は常陸介藤原基房女、康資王母の養女となつたらしい。森本氏はこの安芸を、「待賢門院安芸」と同一人物と考えておられるが、別人説もある。⁽¹¹⁾ 四・五番歌は、正月七日、堀河から安芸へ

若菜に添えて「春毎に互いに年も積んだものだ」と言い送り、「互いに若くありたいもの」と安芸が応じたのであるが、これは同僚としての二人の親しさを感じさせる贈答ではないだろうか。『安芸集』で三度も名が出ている女性はこの堀河だけである。五一番の連歌にも同様の雰囲気を読み取れるように思われ、その点で安芸の養母である『康資王母集』に見える「ほりかは」が注目される。

⑤『康資王母集』（国立歴史民俗博物館蔵『伯母集』による）

六条院人くゝかたゝかへてあか月にかへらるゝに

月も見しくさのまくらとおもひいてゝちりぬほとにまたかへりこよ（七七八）

よしなしこといひたるかへりことに

みる人の心をしらはかせふきてくもなかりそやまのはの月（七七九）

せんさいの中になんのかほりいてたるにほりかはにきこゆる

たれかぬしひもゆふくれのふちはかま（八〇a）

ときこえしかは

ふきとく秋のかせやしるらむ（八〇b）

康資王母は筑前守高階成順女、母は伊勢大輔。『後拾遺集』初出歌人で、四条宮寛子女房。はじめ花山天皇孫で神祇伯の延信王との間に康資王を生み、後に常陸介藤原基房と再婚したらしい。郁芳門院安芸を「とり子」したことは、安芸と康資王母及び伊勢大輔の家集によって知られる。八〇番の連歌の相手「ほりかは」は、七八・七九番歌が六条院の女房たちに関係した歌と思われる点から推して、「六条院の堀河」と考えられる。「六条院」とは郁芳門院御所をさす場合も、女院その人をさす場合もあることは森本氏による指摘がある。⁽¹³⁾ 八〇番の連歌も、『安芸集』のそれと同

様の親しさが感じられると共に、詞書に謙讓語「きこゆ」が用いられている点でも注目される。

更に同時代の廷臣歌人の家集にも「(六条院の)堀河殿」の名が見える。

⑥『行宗集』(書陵部蔵一五〇・五四四による)

郁芳門院かくれさせたまひてつきのとしのあきおまへのつほのはきを見て

はきかはなおなしにほひにさきにけりうかりしあきのつゆもさながら (六五)

かへし

堀河殿

みるたひにつゆけさまさるはきか花おりしりかほになににほふらん (六六)

源行宗(一〇六四—一一四三)は三条源氏、参議基平男、同母兄に行尊大僧正がいる。寛治八年従四位下、院の昇殿を許されて藤原顕季と親交を結び、嘉保二(一〇九五)年八月二十八日の「郁芳門院前裁合」に出詠している。⑥の贈答は郁芳門院崩御の翌年、女院御所の前裁を見て行宗が詠んだ歌に、堀河殿が返歌したもの。『今鏡』(村上の源氏)の郁芳門院崩御後の記述に、「(父上皇が)六条院に御堂たてさせ給ひて、昔おはしましたしやうに、女房・侍などかはらぬさまにいまだ置かれ侍るめり」とあるが、郁芳門院の女房らは、女院崩御後も四散せず六条院に住んだらしい。同集には他に「六条院とはとのおはしましたしにほのく」とあるほとに女房たちいつみとのゝあさかほみにふねにのりておはせしにおひてたてまつりし」(二五詞書、返歌は作者名なし)や「鳥羽殿にて月のあかゝりしをり郁芳門院女房のなかにたてまつりし」(七〇詞書、返歌は「みくしけとの」とも見え、行宗と郁芳門院女房らとの交流のさまが窺える。

⑦『江帥集』(冷泉家時雨亭文庫蔵による)

六条院のほりかはとのゝしふつくられたりけるをゆかしかりて人にかはりて

かきつむるあまのかるてふもしをくさいかてかうたのしまは見るへき (四八一)

かへし

うら人はかきつめしかともしほくさそのもくつをそたれかたつねん (四八二)

大江匡房は白河院司として別当を兼ねた人物であり、「郁芳門院根合」等にも参加、郁芳門院の女房とは公私にわたり交流があったと思われる。「六条院の堀河殿」が家集を編んだのは、『江帥集』における位置から見て、匡房の晩年期のことと思われる、堀河の家集の自撰は、或いは『大式集』や『基俊集』に見える堀河天皇による家集収集の頃のことである可能性もあろう。⁽¹⁴⁾ また詞書には「集つくられしを」と敬意を込めた表現が見える。

以上④から⑦までの資料に見える「ほりかは」は、森本氏によって①③の「堀河殿」とは別人とされている。森本氏は、「六条院堀川」について論じて、『安芸集』等を引用しながら、「根合の女房方人中『堀河殿』とある人は、袋草紙(上)によると、鳥羽殿における和歌御会で白河院の御製(池上月)の代作をした上臈女房であり、大宮右大臣(俊家)の女であって、ここにいう堀川とは関係がない」と述べている。⁽¹⁵⁾ 森本氏があっさり別人とみなされた背景には、橋本不美男氏が①の堀河(『袋草紙』雑談の堀河殿)を師通室の全子(俊家女)に比定しておられたことがあるらしい。⁽¹⁶⁾ おそらく森本氏は、白河院の許にも郁芳門院の許にも同じ「堀河」と呼ばれる女房がおり、④⑦の堀河は郁芳門院方の女房で別人なのだと考えられたのであろう。無論、院と女院の双方に堀河という女房がいた可能性はある。しかし、③の根合の記録を見ると、同名の女房がいた場合は、「院」「宮」「内」を冠して区別しており(「美乃」や「備前」など)、堀河や安芸らにはそのような区別がされていない。つまり「堀河」は同名の他の女房がその場になかったと考えられる。そして、この根合の「堀河殿」が『安芸集』以下の堀河とは異なる人物だとしたら、④⑦の「六条院の堀河」は歌合をも兼ねたこの催しに参加しなかったことになるが、それはいささか不自然にも思われ

る。⑦によれば「六条院の堀河殿」は家集を編んでおり、そこから堀河には歌詠みとして自負するところがあったと想像されるからである。歌詠み女房として康資王母や行宗・匡房等の廷臣歌人とも交流の見られる堀河であるから、郁芳門院御所における歌の場には参加した可能性が高いのではないだろうか。また、③の『中右記』を見ると、子刻頃に人々が立つ折（この日の根合は左方庄勝、歌合は左右ともに勝一で、持七、未判一）、「堀川殿」が「アキトノ」に歌を詠み掛けたものの返歌が無く、左方の人々が笑ったとある。「アキトノ」は右方にいた安芸である（『中右記』の根合記録は左方の立場からの記録、『袋草紙』が引用した『江記』が右方の記録であることは、萩谷氏によって整理されている）。安芸がその時なぜ返歌しなかったのかは不明であるが、堀河殿が安芸に歌を詠みかけたという行為の背景に、この二人の個人的な関係が考えられないだろうか。具体的には資料④の贈答や連歌に見られるような、堀河と安芸の間の親しさがあったと考えることも可能ではないだろうか。また、行宗や匡房の家集に見える「堀河殿」（⑥⑦）も、①③の堀河殿と別人としなければならぬ必然性も無いように思われるし、康資王母や匡房が敬意を込めた詞書表現にしているのも、相手が上臈女房であったからと考えられないだろうか。つまり①③⑦の「堀河殿」「ほりかは」「六条院のほりかはとの」は全て同一の人物を指していると考えerほうがよいのではないかと思われるのである。

以上のことから、この堀河は大宮右府こと俊家女で、郁芳門院女房であり、おそらくは女院の崩御後も六条院に残り、康和末か長治初め頃には家集を編んでいたらしい。なお『統詞花集』（一一五番）によれば、根合の時の堀河の歌「ふたこゑと…」は、基俊による代作ということになるが、『基俊集』にはこの歌がなく、そのあたりの事情は判然としない。ただ、『散木奇歌集』四〇九番詞書に「基俊の君の堀川の家にて」とあることから、基俊が堀河に家を持っていたことが知られ、或いは姉妹にあたる堀河の女房名と何か関連するのではないか、とも考えられるが、彼ら

の祖父頼宗も堀河第に居住したことで知られており、俊家女が「堀河」と呼ばれた事情や、堀河の人生についてはなお不明な点が多い。

2 前齋院六条と待賢門院堀河（顕仲女）

次に、著名な待賢門院堀河について、その前半期を検討したい。

⑧『今鏡』（引用は『今鏡全釈』による）

a、古き哥詠み、撰津の御といふ人、六条とて若哥詠みなどありて、折節につけて心にくきごたち多く侍けり。

（むらかみの源氏第七 ありすがは）

b、歌なども人々参りて詠む折も侍りけり。「水の上の花」とかいふ題の歌、時の歌詠みども参りて詠みけるに、

…（中略）…堀河の君とて、顕仲の伯の女のおはせし歌、

雪と散る花の下行く山水のさえぬや春のしるしなるらむ

又、

谷川の岸の桜の散るままにいとど咲きそふ波の花かな

（aに同じ）

c、女子は堀河の君、兵衛督などきこえ侍りて、みな歌詠みにておはすときこえ給ひし。姉の君は、もとは前の齋

院の六条と申しけるにや。金葉集に、

露しげき野辺にならひてきりぎりすわが手枕の下に鳴くなり

と詠み給へるなるべし。堀河とは、後に申しけるなるべし。かやうなる女歌詠みは、世に出で来給はむ事かたく

侍るべし。

(むらかみの源氏第七 武蔵野の草)

以上の a、c の三つの記述のうち、a は令子内親王について述べた箇所、b は禎子(禎子とも書く。以下、禎子で統一)内親王の歌会について述べた箇所に、c は頭仲について述べた箇所に見えるのであるが、c が言うように、『金葉集』の前齋院六条の歌の一部(六首中二首)は『待賢門院堀河集』に見え、前齋院六条と待賢門院堀河が同一人物であることは疑いがないと思われる。⁽¹⁷⁾しかし「六条」が仕えた「前齋院」は、a によれば令子内親王のように思われるが、b では禎子内親王と思われる節もある。六条すなわち頭仲女堀河は令子内親王・禎子内親王のどちらに仕えたのだろうか。或いは両方に仕えたのだろうか。

森本氏は、早い時期の論文⁽¹⁸⁾において、郁芳門院堀川が女院崩御後に前齋院令子内親王に仕えて「前齋院六条」と呼ばれ、更に待賢門院にも出仕した、とされた。しかし後年の論文⁽¹⁹⁾では「郁芳門院堀川」待賢門院堀河」を否定し、「前齋院」も令子内親王ではなく同母妹禎子内親王であるとされ、また堀河は待賢門院とほぼ同年齢(具体的には康和二(一一〇〇)年頃の誕生となる)⁽²⁰⁾とも推定された。「前齋院」については『金葉集』における令子内親王の呼称等から判断されたもので、令子内親王は「前齋院」と呼ばれた時期が比較的短く(令子の前齋院期は、森本氏推定の待賢門院堀河の誕生前後に重なる)、鳥羽天皇即位時に准母として皇后宮になり、『金葉集』はそれから更に二十年余の後の成立であるから、令子内親王家女房は『金葉集』では皇后宮を冠して呼ばれているのである。具体例を挙げれば次の如くである。

皇后宮弘徽殿におはしましけるころ、俊頼にしおもてのほそ殿にてたちながら人に物申しけるに、よのふけゆくままにくるしかりければ、つちにゐたりけるをみてたたみをしかせばやと女の申しければ、たたみはいしただたみしかれてはべりと申すをききてよめる

皇后宮大式

いしだたみありけるものをきみにまたしく物なしとおもひけるかな (雑・五九三)

この歌は『大式集』(一四九番)と『散木奇歌集』(一三〇一番)の双方に見える歌であり、「皇后宮弘徽殿におはしましける頃」とは令子内親王の前齋院時代の後半期で、康和四年十一月に内裏入りした令子内親王は弘徽殿を御所としていた。このように「皇后宮」が令子内親王を指すとすれば、同集の「前齋院」は別人と考えるほうが自然であろう。

『金葉集』編纂時期に前齋院と呼ばれた可能性のある人物は複数おり、

佳子内親王(後三条天皇皇女)、延久元々同四年齋院、大治五年七月薨

禎子内親王(白河天皇皇女)、康和元々嘉承二年齋院、保元元年正月薨

が挙げられる。佳子内親王よりも、時期的に近い禎子内親王のほうが該当する可能性は高いであろう。この『金葉集』

の「前齋院」が禎子内親王である可能性については、後藤祥子氏も早くから指摘されていたし、佐々木多貴子氏もそ

れを支持している。⁽²²⁾ 令子内親王と禎子内親王は、白河天皇皇女中でも中宮賢子を母とし、郁芳門院媼子と堀河天皇の

同母姉妹である。禎子内親王は生後まもなくから四条宮寛子の許で養育され(『水左記』永保元年八月十日条)、姉令

子内親王の後を承けて齋院となったが、齋院を退下した後も養母寛子と行動を共にしていた(『中右記』嘉承二年七

月二十二日条、『殿曆』天仁元年二月二日条ほか)。四条宮寛子は優れた歌詠み女房を抱えていたことで知られるが、

禎子内親王はその御所で育ち、『今鏡』の伝えるところによれば「常に法の筵を開かせ給」う一方、引用bのように

歌会を催すこともあったようである。従って禎子内親王家の女房中に、『金葉集』に採られるような歌人がいたとし

ても不自然ではない。また、この頃の宮家の歌会は、例えば皇后宮令子内親王家の歌会について、勅撰集・私撰集・

家集等により、その歌と作者を整理してみると、参加者は皇后宮職の人々(身内を含む場合もある)と院の意向によ

って参加した廷臣歌人（俊頼・顕季など）、そして女性には皇后宮女房に限られるようである。このことから推して、禎子内親王家の歌会に堀河が参加していた事実は、堀河がその家の女房であった可能性が高いことを示すのではないだろうか。

『今鏡』のaとbの資料は、郁芳門院媞子内親王の伝記に続いて、その同母妹たち、令子・禎子両内親王について語る部分の一節であるが、特に令子・禎子についての記述には、それぞれの特色を強調しつつ、対比を意識した要素も見られる。すなわち令子については「古の宮ばら」の風雅な生活を彷彿とさせるような暮らしぶりであること、具体的には女房らが琴を弾いたり源氏物語を話題にしながら暮を打つなどし、また歌詠みの女房も多く仕えていた、と述べるが、摂津や六条と歌詠み女房の名を挙げるのみで歌そのものは示されていない。また藤原為業ら若い殿上人の見聞したこととして記述されている。これに対して禎子については、「法の筵」の話題に次いでbのように歌会のこととに触れ、その時の歌を挙げている。令子に関する部分で歌が示されていないのは、『金葉集』を初めとして『散木奇歌集』や他の家集等にも、「皇后宮」令子の許で詠まれた歌が少なからず見られる事実に照らすと、やや不審である。しかしbで話題にされている「前齋院」禎子家の歌会資料が、『今鏡』の他には見出し難いことを考えると、これは『今鏡』編者が特に禎子家の歌会資料を持っていたためであったと考えられよう。そして、このような執筆態度や事情のもとに書かれた『今鏡』の記述a・bを、史料としてどこまで信頼すべきであるのか、検討の余地があると言えよう。

なお、森本氏の論（3に同じ）中には、令子家の女房歌人の代表格である摂津についても、その主人は令子か禎子かの混乱が存したことに関連して「前齋院として同じ邸に住んだことから、どちらにも仕えたとみれば簡単であるが」と述べた箇所⁽²³⁾が見られる。更に堀河についても、前齋院が禎子を指すことと『今鏡』の記述とを矛盾無く処置する方

法は、「令子内親王の女房だった六条は、同母の妹宮禰子内親王が齋院を退下してのち、令子内親王が皇后宮となり、内裏に住むようになってのち—禰子内親王方へ転任した」と解することであると述べている。⁽²³⁾（波線部は私意による）。しかし、この二箇所については、事実誤認などの問題を含む文脈と言うべきであろう。令子・禰子の姉妹は、生後まもなくから、令子は師実夫妻の許で、禰子は四条宮寛子の許で養育されており、成人後も同じ御所に住んだという記録が史料にはほとんど見出せないのである。姉妹が別々に養育されたことは『栄花物語』巻三十九（布引滝）及び巻四十（根合）に記事があるほか、史料にも見える（令子については『中右記』永久二年四月五日条、禰子については『水左記』永保元年八月十日条）。齋院退下後も、令子内親王は、初めは主として源国信邸に住み（『中右記』康和四年十一月十七日条）、その後内裏に移って堀河天皇と概ね天皇と行動を共にした（『中右記』『殿暦』に記事多数）。その間に里第の二条堀河邸が落成、此処と内裏を往復したが、それは堀河天皇が崩御し幼帝鳥羽の准母として皇后宮となった後も続いた。また、方違えや病では三条の藤原有佐邸や二条の藤原経忠邸に退出することもあった。同じく齋院退下後の禰子内親王は、養母・寛子の許に戻って共に枇杷殿に住み（『中右記』嘉承二年七月十九日条・同二十二日条）、出家後（天治二年十二月二十五日）に土御門第に還り住んでいる。このように同母姉妹とは言え、二人は同じ邸第に住んだ時期はほとんど無いと見てよく、従って両内親王の「どちらに仕えたと言ってもよい」ような状況は無かったと考えられる。また、顯仲女堀河（六条）を待賢門院璋子と同年齢、すなわち令子が齋院を退下した頃に誕生した、と推定する一方で、彼女が前齋院時代の令子に仕えており、令子が皇后宮となった後に前齋院禰子の許へ転じた、と考えるのも、堀河（六条）の年齢から見て非常に苦しい。何しろ令子内親王が立后したのは齋院退下の八年後である。堀河の生年を璋子より十年早いと推定し直したとしても、令子に仕えた時期を、十代の一時期と見なければ成り立たないであろう。また、仮に堀河（六条）が令子の許に仕えた時期があったと考えた場合も、若い

女房が、皇后宮となった華やかな令子内親王の許から前齋院禎子内親王の許へ、敢えて転ずる必然性もあり無いように思われる。

このように『今鏡』の記述をすべて事実と見なして、他の事実と整合性を持たせようとするには無理があると言わざるを得ない。とすれば、ここは他の同時代史料や『金葉集』などが示す事実のほうを採るべきであろう。すなわち、頭仲女の堀河は、初め六条の名で前齋院の禎子内親王に仕え、その歌を『金葉集』に採録された。永久五（一一一七）年十二月に、璋子が鳥羽天皇に入内、『金葉集』初度本が撰進される頃、天治元（一一二四）年には待賢門院の院号を受けた。また、前齋院禎子内親王は天治二（一一二五）年十月に出家しており、璋子所生の統子内親王（上西門院）が齋院に卜定されたのが大治二（一一二七）年四月であった。統子内親王は長承元（一一三二）年六月に齋院を退下したが、森本氏は、その頃に堀河の妹兵衛が統子内親王付きに転じ、代わって姉の堀河が待賢門院に仕えたのではないかと推測されている。統子内親王の齋院卜定は禎子内親王が出家して一年半後のことであり、恐らく主の出家などを機に禎子内親王家を離れた六条が、やがて妹の縁で待賢門院に再出仕し、そこでは堀河の名で呼ばれたのであろう。堀河と兵衛は、一時は姉妹ともに待賢門院に仕えていた可能性もあるのではないか。禎子家での女房名「六条」は、祖父頭房が六条右府と呼ばれたことと関連があるのかもしれないが、判然としない。また待賢門院の許では「堀河」と呼ばれた事情も、現段階では推察の手がかりがない。ただ、堀河は夫と死別し、その夫との間に子があったことが家集（一一二〇番）によって知られる。また、森本元子氏がそれとの関連を指摘される『言葉と歌集』雑上の贈答歌（『新千載集』一六六五・一六六六番にも採録）がある。

子日にあたりたりける日、伯のもとにやしなひたりけるちごのもとへ 待賢門院堀川

いざけふは子日のまつひきつれておいきのちよをとみにいのらん （二三三）

返し

神祇伯顯仲

いのるともおいきのまつはくちはてていかでかちよをすぐべかるらん (二二四)
森本氏も想像されるように、父顯仲に幼子を預けて宮仕えをしていたものであろう。

以上のように、顯仲女の堀河は、若い頃に前齋院禎子内親王に仕え、「前齋院六条」の名で『金葉集』に歌を採られ、禎子内親王の出家などを機に待賢門院女房に転じたものと考ええる。

3 摂政家堀河

前章で検討した顯仲女堀河と同時期の人物として、摂政家堀河なる女房がいる。摂政忠通家女房と見られるが、勅撰集には『金葉集』の次の歌一首のみである。

⑨『金葉集』巻八・恋下 (以下、特に断りのない限り、引用は新編国歌大観による。傍線は私意により付した)
くれにはかならずとたのめたりける人の、はつかの月のいづるまで見えざりければよめる

摂政家堀河

ちぎりおきし人もくゞくゞくゞこのこのまよりたのめぬ月のかげぞもりくる (四七〇)

また、忠通は永久三年以降大治元年までに十余回の歌合を催したが、その忠通家歌合の資料中に、次の如く堀河なる女房の歌がある。

⑩「摂政左大臣忠通歌合」大治元年八月 (傍線は私意により付した)

旅宿雁

五番 左持

堀川

かりがねとともに越路にあらねどもおなじたびねに鳴わたる也

右

参河

かりがねもたびの空にぞきこゆなる草のまくらはひとりとおもふに

ともにあしうもきこえず。おなじほどの歌にや、仍持と定まうす。

恋

五番 左

時昌

君こふることのはばかりいろに出てあはでのもりのちりぬべきかな

右

堀河

つれなしとかつはこゝろをみやま木のこりずもをのゝをとづるゝかな

前の歌は「色にいづることのはの」と「あはでのもり」とはおなじきか。おぼつかなきやうにきこゆれど、なをあはでのもりのことのはなめりとおもひなせば、あしうもきこえず。次歌は、うためいたり。いとおかし。但、近曾しのびたる人の歌合に、見しやうにおぼえそふらへば、ひが事にやさふらふらむ。よみ合はせたらば、よしかくれの歌なりとて、おしてとりたらば、ぬしやはなむかむとおぼえさふらふかな。

この大治元（一一二六）年八月の歌合は忠通家歌合の最後のもので、判者は源俊頼。女房歌人は二人、すなわち堀河と三河である。三河は兵庫頭源仲正女、忠通家女房で、忠通家や顕輔家の歌合等に出詠しており、『金葉集』（八〇番・二六〇番）初出歌人である。

ところがこの歌合の堀河の歌のうち後者は、次のように作者を「待賢門院堀河」として『万代集』及び『統後拾遺

集』に採録されている。

⑪ 法性寺入道前関白家歌合に 待賢門院堀河

つれなしとかつはころをみやまぎのこりずもをののおとづるかな (万代集・二〇一七)

⑫ 法性寺入道前関白家の歌合に 待賢門院堀河

つれなしとかつは心のみ山木のこりずもをのの音づるかな (続後拾遺集・恋二・七七六)

この⑪⑫の作者表記が正しいとするならば、⑩「大治元年八月・忠通家歌合」の堀河は待賢門院堀河(源顕仲女)と同一人物ということになる(ただし「つれなしと」の歌は『待賢門院堀河集』には見えない)。では、⑨の堀河と⑩の堀河は別人なのであるうか。

しかし、⑩の堀河も、三河と同様に忠通家女房として歌合に参加したもので、⑨の堀河と同一人であると考えうが自然に思われる。萩谷氏の見解もこれと同様である。⁽²⁵⁾ また、⑨及び⑩の堀河の歌で、上からの流れでは用言、下への流れでは体言となる掛詞が、必ず二句又は三句にあるのも、単なる偶然であろうか。同じ作者の「詠みくせ」と見ることも可能ではないだろうか。ここは、大治の頃に忠通家に堀河と呼ばれた女房が居り、『金葉集』及び『忠通家歌合』にその足跡を残した、と見るべきではないだろうか。前齋院禎子内親王に仕えていた顕仲女の六条が、禎子内親王出家と同時に忠通家に移り、ほんの一時期「摂政家堀河」と呼ばれて、その後に待賢門院に仕えたと考ええるならば、資料⑨⑩と資料⑪⑫との整合性がとれるのであるが、それは⑨の『金葉集』四七〇番歌が大治初年頃の詠作であること、及び『金葉集』が同一歌人を時期によって呼び分けて複数の名で示していること、の二つが確実でなければ成り立たないであろう。やはり、待賢門院堀河とは別の、忠通家女房の堀河が存在し、資料⑨と⑩はそれを示していると考えるべきであろうし、⑪⑫は後世に待賢門院堀河が著名であったが故に生じた誤解の表れではないだろうか。

これとは逆に、待賢門院堀河の歌とされている中に、問題をはらむ歌がある。それは次の歌合のものである。

⑬「神祇伯頭仲西宮歌合」

萩寄恋

十六番 左

左大弁為隆

萩のはは暮れ行く風に音すなり我が待つ人のかゝらましかば

右

堀川殿下女房

逢ふことはかた野にしげる萩のはの音をばたつな秋ははつとも

「わがまつ人のかからましかば」と思ひける風の音こそ、「片野にしげる萩の葉」よりも、聞き所ありておぼえ侍れ。

この歌合は、大治三（一二二八）年八月二十九日、摂津国広田神社で行われたもので判者は基俊。顕仲は、翌月二十一日には広田社摂社の「浜の南宮」で（判者は行尊大僧正）、同月二十八日には住吉神社においても（判者は顕仲自身）、歌合を催している。いずれにも顕仲の子女たちが参加していることから、森本氏は、この広田社における歌合の「堀川」を待賢門院堀河と見ている。⁽²⁶⁾しかし、歌合本文（この歌合の証本は群書類従本のみ）には、「堀川」に「殿下女房」と脚注があり、殿下女房ならば忠通家女房である。萩合氏は資料⑩の歌合の解説において、「疑いを存して、後考に委ねる」としながらも、摂政家堀河と待賢門院堀河とを同一人物とする見解を示している。それに従えば、この堀河は待賢門院堀河ということになるので、森本氏と同じ結論になる。しかし両氏よりも早く、野中春水氏は、「殿下女房」の注に従って⑬の「堀川」を忠通家女房の堀河と推定され、併せてこの堀河は待賢門院堀河とは別人であるとの見解を示されている。⁽²⁷⁾

確かに顕仲とその子女たちを中心とした歌合に参加している堀河ならば、顕仲女である待賢門院堀河と考えるのが自然ではある。しかし、顕仲の子女たちは、ほとんどが三度（忠季は二度）の歌合に参加し、複数の歌を詠んでいる。特に娘たちの場合、「伯卿女」「大夫典侍」「兵衛」ら『金葉集』に「前斎院六条」とは別に歌を採られている三人は、三度とも歌合に参加して八首（大夫典侍のみ六首）も詠んでいる。これに対して「堀川」は最初の歌合のみの参加で、歌も一首だけであり、極端に歌が少ない。野中氏はこの点からも待賢門院堀河とは考え難いとしている。また、この三度の歌合（歌人総計二十六人）には、顕仲一家のほかに、行尊・顕輔（ともに三度参加）や基俊・雅兼・大進（ともに二度参加）など、身内や友人が少なからず参加しているが、右の行尊ら五人のほかは、参加は一回で歌も一首だけという人が多い。言い換えれば、一回の参加で歌一首のみというのは、顕仲子女というより、その他の参加者のあり方なのである。このような事実と本文の脚注「殿下女房」、及び「堀川」の歌の一・二句目「逢ふことはかた野にしげる」に見られる掛詞が、⑨⑩の忠通家堀河の掛詞表現に酷似していること、などによって総合的に判断するならば、この作者はやはり待賢門院堀河ではなく、忠通家堀河であろう。もっともこの場合は、顕仲の子女中で待賢門院堀河だけが歌合に全く参加していないことになり、それはそれで疑問が残る。ただ、3で述べたように、待賢門院堀河には結婚及び出産の時期があるので、それとの関わりを考えることも可能ではないだろうか。

『金葉集』の撰政家堀河は、おそらく待賢門院堀河とは別人であって、大治元年八月の忠通家歌合に連なった人物であろう。そして大治三年の神祇伯顕仲西宮歌合にも参加している可能性が高い。しかし、この堀河については出自などの一切が不明であり、待賢門院堀河との関係においても、若干問題が残ると言わざるを得ない。

4 二条太皇太后宮堀川

『風雅集』雑歌下に、次のような歌が見える。

- ⑭ 昔法金剛院の梅をめでける人の、年へて後いかなりぬらんといふに、をりてつかはすとてよめる

上西門院兵衛

なに事も昔がたりになりゆけば花もみし世の色やかはれる

(一九六四)

返し

二条太皇太后宮堀川

かくばかりうつりゆく世の花なれどさくやどからはいろもかはらず (一九六五)

「二条太皇太后宮」とは、顯仲女堀河の箇所で述べた令子内親王のことで、長承三(一一三四)年に太皇太后となつた後の呼称である。森本元子氏は、この上西門院兵衛と贈答した堀川を「待賢門院堀河その人に違いあるまい」と述べ、堀河が若い頃に令子内親王に仕えたこととされることからの誤りとされる⁽²⁸⁾。しかし、待賢門院堀河と同一人物だとしたならば、同集の同巻に「待賢門院堀川」の歌(一九五五番)がある一方で、「二条太皇太后宮堀川」の歌もあるのは不審である。これは誤りというよりも『風雅集』撰者が二人を別人と解していたためではないだろうか。

ところで『今撰和歌集』八番及び七〇番詞書等によれば、令子内親王は「二条大宮」とも呼ばれていた。そして、その「二条大宮」に仕えた「ほりかは」なる女房の歌の資料がもう一つ存在する。

⑮ 『林下集』

二条大宮ほりかは故卿女也 ひととせひよしのやしろにて神ぐらをしてはべりしを、又いかでかきくべきな

ど上西門院の兵衛どにつたへて申して

ゆふだすきかけてもきみはしらじかしありしにはびのかけをこふとは

(二七八)

返し

さかきばのいろをもかをもしる人をしりそめぬるもかみのめぐみか

(二七九)

かくてつかはしたりし返ごとに、これはつたふべしとて 兵衛どの

いつかまたしめのほかなるよそ人もこふるにはびのかけをみるべき

(二八〇)

さてまたかのほりかは、返ごとに

人しれぬころにかけしゆふだすきかかるとかみのしるしなるらん

(二八一)

『林下集』は後徳大寺実定(一一三九―一二九二)の家集で、実定は待賢門院璋子の同母兄実能の孫である。ここで言う「二条大宮のほりかは」とは、令子内親王家の女房を指すと考えられるが、内親王は天養元(一一四四)年四月二十一日に崩じた。その令子内親王に仕えたいらしい女房の歌が実定の家集に見えるのは、詞書の「つたへて申して」「つかはしたりし」等から見て、上西門院兵衛が実定(若い頃と思われる)との間を仲介したためであろう。この集には実定と兵衛の贈答が他にいくつも見られ、二人の親交が窺われる。また、上西門院兵衛が関係した贈答という点では、⑭『風雅集』の場合と酷似しており、この⑮では「ほりかは」も兵衛も、「木綿襦」「庭火」「注連の内」と、齋院に仕えたことを示す言葉を用いている点が興味深い。そして、⑭⑮の二つの資料は、二条太皇太后宮(二条大宮)すなわち令子内親王に仕えた「ほりかは」という女房が存したことを示唆しているのではないだろうか。⑮の贈答の時期は未詳であるが、仮に「ほりかは」が令子内親王の齋院時代から仕えた女房であったとすると、かなり老齢であったろう。「故卿女也」という注は、この堀河の出自の手がかりとして調査・検討を試みてはいるものの、未詳であ

る。ただ、彼女が上西門院兵衛と親しい点からは身内関係も疑われ、仮に「故卿女」が「伯卿女」の誤りであったならは「故」と「伯」とは、最も崩して書いた場合には字形がやや似る）、この堀河は顕仲女となるが、現段階では想像の域を出ない。萩谷氏は、『金葉集』の前齋院六条を『風雅集』の二条太皇太后宮堀川と同一人物と見て、「顕仲の女達の中に、それぞれ或時期において『堀河』と呼ばれた女性が二人もしくはそれ以上いた為に、すべての混乱が生じたものと考えられる」との見解を示されている。

このように「二条太皇太后宮堀川」「二条大宮ほりかは」については、現段階では不明な点も多いが、待賢門院堀河と同一人物と考えるのも問題がある。待賢門院堀河は、待賢門院璋子の出家に従って永治二（一一四二）年に落飾し、久安元（一一四五）年の待賢門院崩御の後「久安百首」に活動が認められるが、その後のことは不明である。令子内親王と待賢門院璋子は近い時期に崩じているが、璋子の身内筋にあたる実定が二人を誤るとは考えにくいのではない。また実定が一七九番歌で「榊葉の色をも香をも知る人」と言ったのは、相手の「ほりかは」が齋院に仕えた人であるからであろう。とすれば、やはり令子内親王に仕えた「ほりかは（堀川）」なる女房がいたのではないだろうか。

5 前太政大臣家堀川

これまで取り上げてきた堀河より少し時代が下るが、次の資料にも「堀川」という女房名が見える。

⑬「散位敦頼住吉社歌合」

社頭月

廿番 左勝

從五位下行皇后宮權大進藤原朝臣邦輔

たまがきにひかりさしそふゆふづくよかみにたむくるかげにやあるらむ

右

前太政大臣家堀川

くもはらふあらしのみがく月にまたひかりをそふるあけのたまがき

左歌、ゆふづくよ神にたむけたる心ばへ文字つづきいとをかしきを、もち月ありあけならでとくいりなむや、
くちをし。右歌、ひかりをそふるふしにしたる、ちかくききなれたるこちするよし、さきに申しをはりぬ。

なほ左歌ざままさるべくや。

旅宿時雨

六番 左持

邦輔

たびねするこやのしのやのひまをなみもらぬしぐれにぬるゝそでかな

右

堀川

しぐれつゝものぞかなしきわすれぐさまくらにむすぶきしのたびねは

(判詞略)

述懷

廿番 左持

邦輔

みのうさをわすれぐさこそきしにおふれむべすみよしとあまもいひけれ

右

堀川

よをわたるみちをたがへてまどふかないづれのかたにゆきかくれまし

(判詞略)

これは嘉応二(一一七〇)年十月九日、前左馬助散位從五位上藤原敦頼(高藤流。出家して道因法師と呼ばれた)の主催で、判者は俊成。「社頭月」「旅宿時雨」「述懷」の三題、各廿五番、計七十五番百五十首。二十五人の歌人が詠んだ歌を七十五番の歌合形式にし、俊成の判を得た上で住吉社に奉納したものであろうと萩谷氏は推定される。この歌合の「堀河」は「前太政大臣家」を冠するところから考えて、忠通家堀河の可能性が考えられようか。もっとも「前太政大臣」が誰を指すのかは実は明快とは言いがたく、この歌合以前に太政大臣となつた人物としては、忠通の他に、実行(待賢門院の兄弟)と伊通(近衛后九条院皇子の父)がおり、これに死後追贈された基実(忠通息)や、平清盛、藤原忠雅をも加えることが出来る。実行は応保二(一一六二)年薨、忠通は長寛二(一一六四)年薨、伊通は長寛三年薨、基実が仁安元(一一六六)年薨であるが、歌合に最も直近の「前太政大臣」は、忠雅(花山院太政大臣)である。また、『千載集』等では、実行は「八条太政大臣」、伊通は「大宮太政大臣」、忠通は「法性寺入道太政大臣」と呼ばれており、嘉応二年十月の段階で「前太政大臣」と言つた場合に誰を指したのかは特定し難いが、この前後の時代に、歌集で「太政大臣家」又は「前太政大臣家」を冠して呼ばれる女房歌人が、忠通家の三河と弁のみであることを考慮すると、やはり忠通または摂関家の女房の可能性が高いのではないだろうか。

萩谷氏は、忠通家女房堀河と待賢門院堀河とを「分離しなければならぬ場合」をも想定しつつ、その二人を同一人物とする考えを示しているが、待賢門院堀河は前述のように永治二(康治元)年に出家し、その後の活動は「久安百首」のほかに明確な資料がない。森本氏は「保元・平治の間、六十歳くらいで」死去したかと推測されている。⁽²⁹⁾ 摂政家堀河が待賢門院堀河と別人で、『金葉集』撰進の頃には比較的若年であつたと仮定すると、嘉応の頃まで生存した可能性はあろう。この⑬の堀河は、同じ頃の堀河と呼ばれる女房の歌や資料がほかになく、わずかに摂政家堀河と同

一人物の可能性を指摘できる程度である。

以上、院政期の女房堀河について検討してみた。複数存した堀河について、すっきりとした結論を出すことは出来ないが、先行研究を踏まえつつ、資料を再整理した結果、以下のような結論に至った。

○『袋草紙』雑談の堀河殿（「郁芳門院根合」の堀河殿）は郁芳門院媼子内親王に仕えた女房であり、大宮右大臣俊家女。『郁芳門院安芸集』『康資王母集』『行宗集』『江帥集』に登場する「ほりかは」「堀河殿」とも同一人物と考えられる。女院死後も六条院に留まり、康和末々長治の頃に家集を自撰したらしい。

○顕仲女堀河は、初め前齋院禎子内親王に仕えて「前齋院六条」と呼ばれ、禎子内親王の出家後に待賢門院の許へ再出仕したと思われる。この堀河の宮仕え前半期的主人を令子内親王とする解説が多いが、妹の禎（禎）子内親王と考えるほうが妥当であろう。

○『金葉集』の撰政家堀河は、忠通家女房で大治元年八月の「忠通家歌合」に連なり、また顕仲が大治三年八月に西宮で催した歌合にも参加したと思われる。待賢門院堀河とは別人と考えるのが妥当であろう。

○資料は少ないが「二条太皇太后宮堀川」と呼ばれた女房がいたものと思われ、『林下集』の歌によれば、令子内親王の齋院時代から仕えた女房であった可能性もある。

○嘉応元年十月の「住吉社歌合」の「前太政大臣家堀川」は、撰政家堀河と同一人物の可能性が多少あるものの、はっきりしない。

また、本論考の内容を年表の形にしたものを巻末に示した。

〔注〕

- (1) 「待賢門院堀川と前齋院六條と」(『國語と國文学』一九三八年十二月 至文堂)
- (2) 「院政期歌壇と女流歌人待賢門院堀河」(『古今新古今とその周辺』一九七二年 大学堂書店)
- (3) 森本元子「院政期の女流歌人―特に待賢門院堀河とその家集」(『講座平安文学論究 第三輯』一九八六年 風間書房)
- (4) 一九八九年五月、和泉書院
- (5) 「三二五 大治元年八月摂政左大臣忠通歌合」の「構成内容」の項『歌合大成 増補新訂 第三卷』(一九九六年二月 同朋社)
- (6) 野中春水「神祇伯頭仲の女たち」(神戸大学『國文学論叢』一九五五年十二月)
- (7) 『和歌大辞典』『平安時代史事典』及び『金葉和歌集』『千載和歌集』(新日本古典文学大系岩波書店) 卷末の索引等、「前齋院」を令子内親王とする解説は少なくない。
- (8) 萩谷朴「郁芳門院根合」解説(『歌合大成 増補新訂第三卷』)
- (9) 森本元子「郁芳門院女房に関する問題二項」(『私家集の研究』一九六六年 明治書院)
- (10) 森本元子「安芸と堀川―郁芳門院から待賢門院へ」(『国文』十三号 一九六〇年七月)
- (11) 保坂都「大中臣家の歌人群」第一章「安芸君」(一九七二年 武蔵野書院) 及び花上和宏「郁芳門院安芸とその周辺」(小久保崇明篇『国語国文学論考』一九九九年 笠間書院) 等
- (12) 「とり子」の事情については花上和宏「郁芳門院安芸とその周辺」(小久保崇明篇『国語国文学論考』一九九九年 笠間書院) に詳しい。また、康資王母集については、久保木哲夫・花上和宏『康資王母集注釈』(一九九七年 貴重本刊行会) がある。
- (13) 前掲(10)の論文
- (14) 堀河天皇による家集収集については、滝澤貞夫氏『基俊集全釈』(一九八八年 風間書房) などの論考で触れられている。
- (15) 前掲(9)の論文
- (16) 前掲(9)の論文の注7に「橋本不美男氏はこの俊家女に関白師通室全子を擬しておられる」と説明されている。ただ、その説が明記された橋本氏の論文は未詳。また、『袋草紙』の注釈において、この堀河殿を全子とするものは見当たらない。俊家には、『尊卑分脈』から知られる限りでも、源隆国女をはじめ五人余の妻妾がおり、女子も複数いたらしい。『栄花物語』

(卷三十九) は金子を「四にあたらせたまふ姫君」と述べている。

(17) 萩谷氏は前掲(8)の解説部で、前齋院六条を、後述する二条太皇太后宮堀河と同一人物で顯仲女の一人とされ、待賢門院堀河とは同一人物ではないとする考えを示されている。

(18) 前掲(10)の論文

(19) 前掲(9)の論文

(20) 前掲(3)の論文中「前齋院について」の項

(21) 後藤祥子「伯母・堀河とその集」『國文學』一九六五年十二月 學燈社

(22) 佐々木多貴子「待賢門院堀河論―『久安百首』を中心に―」(旭川工業専門学校『研究報文』一九八〇年三月)の(注1)

(23) 前掲(3)の論文、一六七頁

(24) 前掲(3)の論文、一六六頁

(25) 萩谷氏は、前掲(8)の解説部に於いて、待賢門院堀河は摂政家堀河と同一人物とされる。

(26) 前掲(3)の論文、一七九頁

(27) 前掲(6)の論文。なお、この西宮歌合と次の南宮歌合の二つは、証本が群書類従本のみであるが、作者への注記が一つずつ見られ、南宮歌合では「為実」に「肥前々司」と付されている。「為実」は藤原為実(為真とも書く)で肥前守を務めており、為実への注記は正しいと言える。「殿下女房」の注記も同様に考えてよい。

(28) 前掲(3)の論文

(29) 前掲(3)の論文

女房「堀河」関係年表

☆は郁芳門院堀河、★は待賢門院堀河、○は摂政家堀河

年号(西暦)	媼子・令子・禎子及び璋子関係事項	「堀河」関係事項
承保三(1076)	白河天皇皇女・媼子(郁芳門院)誕生	
承暦二(1078)	白河天皇皇女・令子(二条太皇太后)誕生 媼子内親王齋宮卜定	
承暦三(1079)	白河天皇皇子・善仁(堀河天皇)誕生	
承暦四(1080)	白河天皇皇女・禎(禎)子誕生	
応徳三(1086)	11月26日 白河天皇譲位、堀河天皇即位	
寛治三(1089)	6月 令子内親王齋院卜定	
寛治五(1091)	媼子内親王 堀河天皇准母(中宮)となる	
寛治七(1093)	媼子内親王郁芳門院となる 5月5日 郁芳門院根合	☆郁芳門院堀河、根合に参加 ☆『袋草紙』雑談の逸話
嘉保元(1094)	8月 十五夜鳥羽殿御会「池上月」	郁芳門院女房ら六条院に残る
永長元(1096)	8月 郁芳門院崩御	☆『行宗集』65・66の贈答
承德元(1097)		
康和元(1099)	6月 令子内親王齋院退下(病のため) 10月 禎子内親王齋院卜定	
康和二(1100)	藤原璋子(待賢門院)誕生	★待賢門院堀河この頃誕生か (森本元子氏)
嘉承二(1107)	7月 堀河天皇崩御、鳥羽天皇天皇即位 禎子内親王齋院退下、前齋院となる 11月 令子内親王准母として立后	☆郁芳門院堀河この頃家集編む (『江帥集』より推定)
永久五(1117)	藤原璋子、鳥羽天皇に入内	
天治元(1124)	『金葉集』初度本 11月 藤原璋子、待賢門院となる	★前齋院六条『金葉集』に採録 ○摂政家堀河『金葉集』に採録
天治二(1125)	10月 <u>前齋院禎子内親王、出家</u>	
大治元(1126)	8月 摂政左大臣忠通家歌合 『金葉集』二度本この頃か	○摂政家堀河、忠通歌合に参加
大治三(1128)	8月 神祇伯顯仲西宮歌合	○摂政家堀河、西宮歌合に参加
大治四(1129)	7月 白河法皇崩御、 10月 皇后宮令子内親王、出家	★待賢門院堀河、この頃出仕か
長承三(1134)	令子内親王、太皇太后となる	
康治元(1142)	2月 待賢門院璋子、出家	★待賢門院堀河、出家
天養元(1144)	4月 太皇太后宮令子内親王、崩御	
久安元(1145)	8月 待賢門院璋子、崩御	
久安六(1150)	「久安百首」成立	★待賢門院堀河、百首に参加
嘉応元(1170)	10月 散位藤原敦頼住吉歌合	前太政大臣家堀河、歌合参加